

小児慢性腎臓疾患児の教育上の諸問題

永峯 博, 斎藤美磨

国立特殊教育総合研究所病弱教育研究部

小児人疾患児の多くは、その治療に永い年月を要し、その間の学校教育には様々な困難が予想される。そこで、われわれは小児慢性人疾患児の教育的処遇の実態をしり、今後の患児の管理の資とするため以下のごとき調査をおこなった。

【調査方法】

全国腎炎ネフローゼ児を守る会の御協力を得て、宮城・埼玉・千葉・東京・神奈川・長野・富山・三重・大阪・神戸・広島・宮崎の12都府県の会員1918名にアンケートを送付し、555名の回答を得た。回答率は28.9%であった。

調査の集計分析は、NEC PC9801, PC9801E, 及びPD9801UV2を使用し、データの集積解析にはN88DISKBASICを使用し、作図にはMS-DOS系のSIMPLE-CHATを使用した。

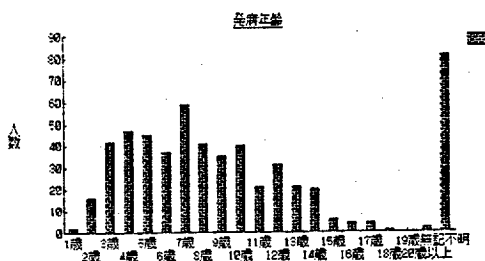
【回答結果】

1. 年齢 回答者の年齢は、7歳以降が大半をしめ、7~12歳の小学校生年代が165人(29%)、13~18歳の中学生・高校生年代が224人(69%)と所謂学齢児童・生徒が大半をしめていた。

2. 発病年齢 発病の年齢は表1に示すように3歳から著増の傾向を示し4歳ではほぼプラトーに達し、次いで7歳に再び小さなピークを示して、以後緩やかに減少傾向を示し15歳以降は激減する。7歳時の小さなピークは学校検尿の影響かと考えられる。

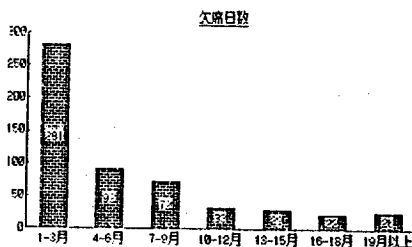
3. 病名 病名の記載のあった者335人について、その病名をみるとネフローゼが272人、慢性腎炎が89人を占めていた。その他透析を受けている人が7人、腎移植を行なった人が2人回答を寄せられた。CAPDをうけている人はいなかった。又、副作用として、消化管かいよう

1,骨そほう症 2,白内障 3がみられた。



【学校教育上の諸問題】

1. 欠席日数 学校教育の基本的な問題としてどのぐらい学校を欠席しているかをみると、表(欠席日数)のごとく、1~3ヵ月が最も多く281人(50.7%)で、残りの半数は3ヵ月以上の欠席を、更に77人(13.9%)は1年以上の欠席を、余儀なくされているようであった。



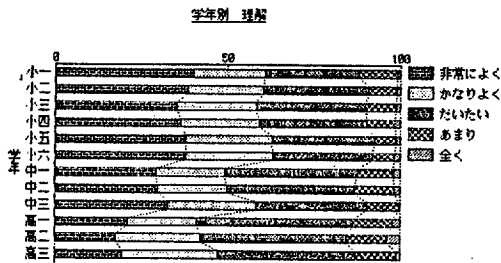
2. 病弱教育経験 このように、学校を欠席することが多くなれば当然学業におくれなどの影響がでてくることが考えられる。そこで、我が国の学校教育制度には長期にわたって療養に専念せざるを得ない児童・生徒に対し医療機関(主として国立療養所)に隣接して病弱養護学校を設置し、また病院内に院内学級を設けるな

ど特別な配慮のもとに教育を行ってきた。

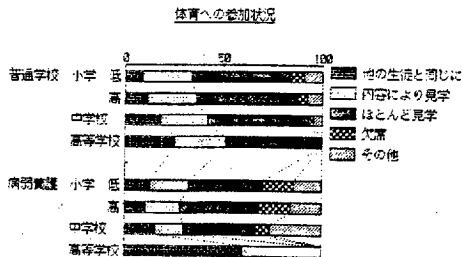
そこで、病弱教育の経験がどの位あるかを調べてみると、240人(43.2%)が病弱教育をうけた経験をもっていた。病名別にみると慢性腎炎89人中37人(41.5%)、ネフローゼ272人中128人(47%)の二者で殆どを占めていた。

3. 病気に対する理解 次に学校に病気のことを話して話したことをよく理解し、配慮してもらえたかという設問に対し、全体としては、表のごとく、その理解の程度は、全体的に見ると40~20%が非常によく理解してもらったと感じており、余り、あるいは全く理解してもらえなかったと感じている者はき15%以下であった。

小・中・高校別にみると、学年が上がるにつれて、低下するようにみえた。しかし、学校ごとの学年を比べてみると、最終学年ではやや理解度が上がるようであった。



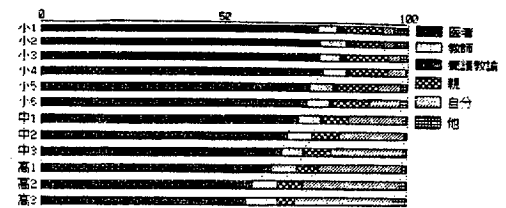
4. 体育の授業への参加状況 慢性疾患児の学校生活で最も問題になると考えられる学校体育の授業への参加状況を見てみると表のごとく、皆と同じように参加しているものは、小学校の全学年平均で約18%で、学年学校種別が進むにつれて参加している者の比率は上昇していた。



5. 体育の授業へ不参加の場合誰の指示によっているか 体育の授業へ不参加の指示者を学年別にみて見ると、表のごとく、当然のことながら医師が最も多い。その比率は小学校1年生で183人中143人(78.1%)をしめ以後加齢と共に減少の傾向を示すものの高校3年生でも78人中45人(57.7%)をしめていた。その他めだったのは高年齢での者は自分で判断しているということで医師、親の指示の傾向と反対に加齢とともに増加していた。

学校関係者ではやはり担任教諭の判断で不参加のことも多いようであった(小学校1年では医師、親に次いで10人5.4%)。しかし直接養護教諭の判断が入ることは案外少ないようであった。

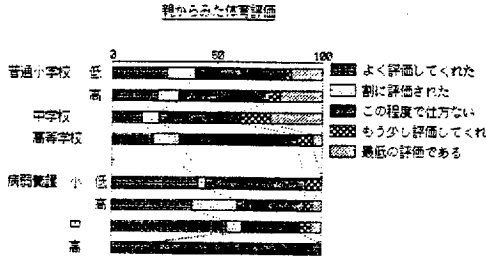
体育への不参加の指示



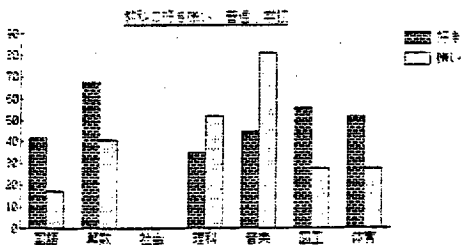
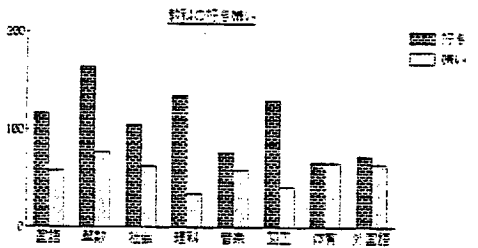
6. 体育の評価について 親や子供にとって現実に問題になるのは教科としての体育の成績である。その成績評価について親や子供はどう感じているのかを見てみると表のごとく、小学校低学年でも大体よく評価してくれたと考えているものは26%程度で全く努力を評価してもらえなかったと感じているものが15.1%をしめていた。また、学年が進むにつれ評価してもらえないと感じている傾向が強まっていた。しかし、高等学校になると関心が薄くなるのか、諦めの気持ちが強いのかまあまあ評価と考える者が多くなるように見えた。又、評価について親と子供の意見を併記してあったものについてその一致度をみてみたところ、ほとんど同じ様な傾向を示していた。

<附> 体育への参加の状況と理解の程度
学校の疾病にたいする理解の程度によって体

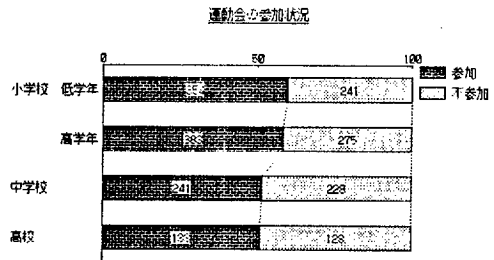
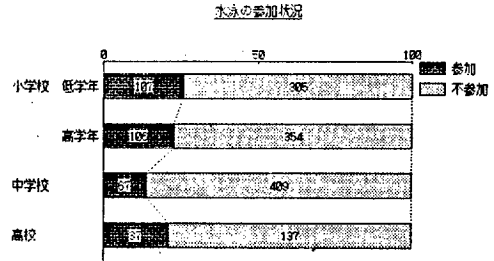
育の授業に参加の仕方程度が違うのかをみてみると、表*体育参加と理解のごとくではっきりした関係は無いように思われた。



7. 教科の好き嫌い 腎疾患児に特有な教科に対する好き嫌いがあるかを知るために教科別に調べてみると表教科の好き嫌いのごとくで、これを普通小学校を対象に調査した中野佐三の報告と比較してみると、算数・理科・音楽・図工の好きな者が多く、特に理科・音楽・図工は普通児集団での調査では嫌いな者のほうが多いのに対し、好きな者が多かった。これに反し、体育は中野の調査では、好きとする者が圧倒的に多かったのに反し、好嫌あい半ばであり相対的にみれば腎疾患児（慢性疾患児）は体育を若手としていると考えられた。



8. 学校行事への参加 子供にとって学校生活で最も思い出に残るものは各種の学校行事である。このような行事にどの位、腎疾患児は参加しているのかをしてみると、表のごとくであった。



9. 学校に行きたがらないことはないか 近年学校嫌い、“いじめ”などが問題とされている。そこで、本症児においてはどうかと調べてみたところ、回答のあった347人のうち89人(25.6%)に何らかの理由で学校に行きたがらないことがあったようである。

その理由としては、友達関係が最も多く31人で34.8%を占め、次いで体育・学校行事があるので各々19人(21.3%)あった。

【体育への参加状況と他の項目】

1. 体育への参加の状況と学校種別

病弱教育諸学校と一般校とで体育への参加の程度がどのようにことなるかを見てみると、表*体育への参加状況のごとく全体的にみて、病弱教育諸学校のほうが参加の程度はすくなかった。

【要約】

小児慢性腎疾患児の教育について、アンケート調査を行い、以下の如き知見を得た。

1) 腎疾患児は病弱養護学校への就学率が43%と他の慢性疾患児の就学率10%前後と比べ高値を示した。

2) 欠席は1～3ヵ月の者が約半数で、3ヵ月以上の者が約1/4、そして1年以上の欠席を与儀なくされている者が約14%もあった。

3) 腎疾患に対し学校で比較的理解してもらったと答えたものが20～40%と案外多かった。

4) 体育への参加状況は、約20%が皆と同じ様に参加していた。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



小児人疾患児の多くは、その治療に永い年月を要し、その間の学校教育には様々な困難が予想される。そこで、われわれは小児慢性人疾患児の教育的処遇の実態をしり、今後の患児の管理の資とするため以下のごとき調査をおこなった。